

平成28年6月18日～19日

介護サービス拡大に抵抗する妻の過去の経験への自負、夫への共依存に焦点をあて認知症高齢者の
デイサービス導入に成功した一事例

村田 智恵

医療法人聖志会 ケアプランセンターわたなべ

要旨：軽度認知機能低下の状態から重度の認知機能低下に至るまで介護支援を継続していく場合、本人だけでなく、時に様々な理由から家族もケアプラン拡大に抵抗を示す場合がある。本事例は、本人による介護の必要性に対する理解不足から拒否が見られたうえ、妻の夫への共依存形成や介護そのものへの不信から妻からの拒否のため、妻自身の介護負担が増加したものである。今回、我々は妻自身に夫に提供される介護サービスを実際に体験してもらい、認知症高齢者である夫の介護を自分以外の他の人に委ねることへの不安の軽減に努めたところ、サービス拡大がスムーズに行なわれ、現在も介護利用が継続している事例を経験したため報告する。

【研究目的】軽度認知機能低下の状態から重度の認知機能低下に至るまで介護支援を継続していくと、本人だけでなく、時に様々な理由から家族もケアプラン拡大に抵抗を示す場合がある。今回、家族である妻自身に提供される介護サービスを実際に体験してもらい、認知症高齢者である夫の介護を自分以外の他の人に委ねることへの不安の軽減に努めたところ、サービス拡大がスムーズに行なわれ、現在も介護利用が継続している事例を経験したため報告する

【事例】A氏：80歳前半、男性、要介護度4

障害者日常生活自立度：J1

認知症日常生活自立度：Ⅲa

既往歴：アルツハイマー型認知症、ペースメーカー装着

A氏の妻：80歳前半、A氏の母を自宅で介護し看取った経験を自負している。

家族構成：A氏夫婦と長男家族6人暮らし

《倫理的配慮》本研究に当たり、本人、家族、所属長及び病院に研究の趣旨を説明し了承を得た。

【経過】A氏が軽度認知機能低下の時から本人も妻もデイサービス利用への抵抗があった。しかし認知機能低下抑制のためのリハビリ主体の半日デイケアには理解を示し、導入を受け入れた。妻は独力で義母を自宅で介護し看取ったことを自負し、家族単独での介護の重要性を強調していた。A氏がペースメーカーの電池交換のため再入院した際、周辺症状が悪化したが無事として妻は介護サービス拡大に抵抗を示したうえに妻自身の疲弊も推測されたため、再度デイケアの導入を薦めた。

妻は、義母の介護を単独で成し遂げた経験から、夫への介護負担が増加することを認めず、依然として独力で介護を行おうとしていた。デイケアの食事内容、入浴体制、介護職員の対応への不安を漏らしていた。そこでデイサービスを選考する際、1、妻も利用時間同席可能であること2、妻が認める認知症ケアのスキルの高いスタッフがいることを条件に約1ヶ月同行して利用し確認してもらった。その後妻同伴なしのA氏単独での利用が可能になり、妻からは介護負担軽減の実感と対応するスタッフへの感謝の言葉が出るようになり、現在に至っている。

【考察および結論】今回、我々は介護サービス拡大に対する妻の抵抗の理由を、過去に義母を介護し看取った成功体験やその自負によるケアマネジャーのケアプランに対する不信、長期間の夫の介護による共依存の形成と捉えた。そのため、新たな介護サービスを提供する際、本人だけでなく、特に妻に実際に体験してもらい、その意見を真摯に受けとめ反映していった。最終的に上記の不安もなくなり、共依存も解消され、ケアマネジャー、ケアスタッフに感謝していただけようになった。このことから、ケアマネジャーは、介護サービス導入に際して、本人だけでなく、家族の心理的課題にも配慮する重要性が再認識された。

【参考文献】松下年子：家族介護者と共依存； 日本認知症ケア学会誌、13(3)560-567、2014